

2月、多摩が雪国になった。3度も雪が降り、その3度目の2月半ばの雪は多摩でも30~40センチもの積雪となり、記録的な大雪だった。その直後、雪国会津に出かける用事があったが、北上する新幹線の窓からは、どこまで行っても尽きない雪の原が続いていた。かんじんの会津に降り立つと、市内はきれいに除雪され、路肩の所々に少しうず高くなっているだけ。雪は多摩の方が多量位だった。

それはともかく、この期間、植物の状態はどうだったか。バス停裏の紅梅の開花に気付いたのは2月8日、2度目の雪の日だった。白梅はわずかに開きかけていた。1月初めには、一般に観賞する花ではないが、法面の高木ハンノキも茶色の房（花）を垂らしていた。スイセンも1月下旬には開花したが、その後すぐに雪に埋もれてしまい、雪が解けた後は茎が折れたまま花をつけている。これまで何度もとりあげているカタバミは、雪が溶けて地面が露出するとすぐ花を1個開かせているのに気づいた。本当に生命力のある野草だと思う。

3月に入るとオオイヌノフグリ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウもポツリポツリ咲き出している。間もなく他の草花や樹木も一斉に開花してくるだろう。それはまた来月にして、まずはウメから見ていこう。

ウメ バラ科 落葉中木 花期；2~3月 果実；6月頃

春が近付くと、もうそろそろ、いつかいつかと気になるのはウメの開花である。2月初めには数日暖かい日が続いていたので、もしかしてと法面を見てまわったのだが、その時は気付かなかった。バス停裏の紅梅の開花に気付いたのは先ほども書いたように2度目の雪の日。“紅梅に雪”となればこれはもう格好の日本画のテーマ。しかし、その期待と裏腹に、くすんだ花びら、ばらけた感じの花、なんかがっかりしてしまった。咲いたばかりで雪に降られこんなになってしまったのだろうか。もう一日、二日早ければ美しい可愛らしいウメの花を見られたらうにと、いくら悔やんでも悔やみきれない気持だった。



2月8日 紅梅に雪

白梅はと見れば、つぼみをほんの少し開きかけていた。それから寒い日が続いたので、3度目の大雪の日も同じ状態がつづき、白梅が開いたのはその数日後のこと。やはり雪に痛めつけられていないウメの花は美しい。

ここに紹介したウメはバス停裏の紅梅と白梅。そして同じ時期に開花した白梅は10号棟北側にも1本ある。法面にはこの他にも10本くらいウメの木があるが、それらは3月上旬にもまだつぼみのままだ。

品種が違うのだろう。園芸図鑑にも花を觀賞するウメと、実をとるための果樹としてのウメと別々のページで紹介されているほどである。花期はどちらも同じように記されているが、実際にはこんなに違う。もっともバス停裏の紅梅、白梅はほんのわずか数日のタイミングで、雪のために開くが開けなくなってしまったのだろうけれど。



(左) つぼみがほころびかけたままの白梅(2月14日)

(右) バス停裏の紅梅(右手前)と白梅(中央奥)。白梅は花が少ないので目立たない。(2月26日)



紅梅と白梅 (2月21日)

ウメは早春の花として親しまれているばかりでなく、梅干しや梅酒としても日本人の生活に溶け込んでいる植物であるが、原産地は中国、奈良朝初めには渡来していて、万葉集にはウメの花の和歌が数多く詠まれている。当時は中国からもたらされた香り高い文化の象徴としてもてはやされていたようだ。

(参考; 、 、)

ハンノキ カバノキ科 花期；11月から

日本全国に分布、低湿地や湿原などに自生する落葉高木、成長すると高さは10～20mになる。当地では湿地ではないが東法面、北法面にある。

1月初め、8号棟3階付近の階段の踊り場から法面の樹を見ると枝にいっぱい何かついているのが気になった。さっそくカメラの望遠をいっぱいにして写真をとってみると、丸く松ぼっくりのような丸い実と垂れ下がった茶色の房が写っていた。当初はひびが入ったような樹皮からヤシャブシと判定していたが、この拡大写真を見ると明らかに異なる。垂れ下がった茶色の房は花。ハンノキかヤシャブシか。この二種類の樹はいつも判定に苦労するのだが、ヤシャブシの花期は3～4月、房のつき方も微妙に異なる。これはハンノキに間違いなさそう。

8号棟3階階段の踊り場から見たハンノキの花と実

(1月5日)



このように高木の花を見るのにはいつも苦労する。枝先に花がついていても高さが10mから15mもあれば肉眼ではさっぱり分からない。見上げる首も痛くなる。たまたま8号棟は北法面に面していて、階段のガラス越しに、同じ高さで比較的近くで見られたのだが、それとて肉眼では良く分からない。高木の観察には倍率の高い望遠レンズで拡大写真を撮ったり、さもなければ、どうしても双眼鏡が必要となる。



(左) ハンノキの花；房状に垂れているのが雄花序、その付け根に赤みをさしてぼちっとなついているのが雌花序。光線の具合が、1月の写真に比べて、雄花序に黄緑が差しているような。(2月21日)

(右) 法面のハンノキ

図鑑によれば、ハンノキは雌雄同株、垂れ下がった茶色の房が雄花序、その付け根付近に赤みをさしてぼちっとなつているのが雌花序と説明されている。が、いまいよく分からない。この茶色の房のどこが花なのか。いや、いつから花なのか。一般の花のように、つぼみがほころび、花弁が開いた時が開花のはず。この茶色の穂が垂れただけで開花なのか、それとも、穂が垂れて花粉を飛ばし始めた時が開花というような区切りはないのか、申しわけないが私には分からない。2月下旬に法面をまわってもう一度ハンノキの写真を撮った。そして地面に落ちた穂（雄花序）も撮ってみた。茶色の穂の中に、緑のものが見える。これが鍵なのかなとも思う。こんなことも考えながら地面に落ちた穂（雄花序）も参照しながら見てください。この穂も3月上旬にはあらかた散ってきている。



(上) 地面に落ちた雄花序

拡大しい見ると。



ところで、『日本の樹木』という本にはこんなことも記されています。

「ハンノキ属に多い特性のひとつ・・・根に根瘤菌を持っていて窒素固定をやり、自前で土地改良ができる(ので、やせ地の緑化事業に使われる)」とのこと。「窒素固定」とは、空気中に存在する分子状の窒素をアンモニアに還元し、生物が利用できるようにすること(生物学用語辞典、HP)。

ちょっと難しいこの話を持ち出したのは、実はインターネットでハンノキのエピソードを検索していくと、上の働きがさまざまな広がりを見せていくのです。

・田んぼの一角にヤシャブシ(同じハンノキの仲間)を植え、落ち葉を肥料に利用した。ある村の言い伝えでは、「ハンノキは山の神さんの足だから絶対に切るな」。上の理由で地力を高めるため。

・ある村の話、「ハンノキの生えている所は焼き畑に適した土地」。上の理由で山を肥沃にする。

話はどんどん広がって、あのヨーロッパの先住民族、ケルトとの関連も見えてきます。

・ハンノキは4月の守護樹で、勇気・慈愛・寛容を表し、ウェールズの守護神プランの樹。

・ケルト民族は農耕民族で、低地を好み、荒地を肥沃な土地に変える肥料木のハンノキを大切にした。

・ハンノキは妖精(フェアリー)の国へ続く道を守る木。

・ハンノキを食樹としているミドリシジミの別名がゼフィルスで、ゼフィルスはギリシャ神話のゼフィロス(西風の神)を語源としていて微風のニュアンスがあり、妖精のイメージと重なってくる。

(樹げむ舎 HP から)

この他にもいろいろケルト関連の記事が見つかります。私自身まだ北欧神話や妖精物語を読んでいないので、以上は HP からの孫引きでの紹介です。何時か機会を見つけて、妖精物語など読んでみたいと思います。

このようにふだん何気なく見ている身の回りの植物にも、調べると思いがけない広がりが見つかる場合もあります。これもまた、植物を調べていく面白さの一つでしょう。

(参考; , , HP)

スイセン ヒガンバナ科 花期; 12月~4月

地中海沿岸原産の多年草。古い時代に中国を経て日本に入ってきたらしい。本州の関東地方以西の海岸に野生化している。



清楚な草姿のスイセンは厳冬から早春の花として広く愛好されている。当地でスイセンの花を見たのはまず西公園で1月半ば、わが団地法面では、バス停裏付近のスイセンが1月末に咲き始めた。ところが2月の大雪ですっぽり覆われてしまい茎が折れてしまった。しかし折れてもなお次々と開花している。スイセンもまたたくましい花だ。



(上) バス停裏付近に咲き出したスイセン (1月28日)

(右) 雪で茎が折れてしまったが、茎の先に花がついている。
(2月21日)

法面を丹念に見ていけば、バス停裏付近から東法面にかけて数カ所3種類のスイセンが、そして北進入路脇、10号棟北側などにも日本水仙が生えている。というよりどなたかが植えたのだろう。バス停裏では雪で折れてしまったが、他の場所では折れてないのでほっとしたが、3月半ばに見て回ったら茎が折れているものが多かった。なぜだろう？

図鑑でこの花の説明を見ると、「花被片はわずかにクリーム色を帯びた白色で、平開する。のどの部分にある副花冠は黄色で杯型」、こんな風にしてあり、「花弁=花びら」という言葉を使っていない。これは、花弁とがくが区別できない場合、花弁とがくをまとめて「花被片」というとのこと。また、「副花冠」とは、花びらの内側にある弁状の付属物の意味。それにしても専門用語の説明は分かりにくいものです。

ところで、スイセンは、「ヒガンバナ科」に分類されています。花の形が全然違うのに不思議ですね。スイセンはヒガンバナ等と同じように、染色体の構成が三倍体なので、まったく種子ができない、もっ

ばら球根の栄養繁殖だけで増えていくので、分球能力はきわめて旺盛とのこと。種子ができないので品種改良はできないらしい。

またまた、小難しい話になってしまったので、口直しにギリシャ神話を。

美少年ナルキッソスはその美しさにさまざまな相手から言い寄られたものの、高慢にはねつけ恨みを買った。そんな彼への呪いを聞き入れた復讐の女神ネメシスにより、水鏡に映った自分自身に恋してしまった。水面の中の像はナルキッソスの想いに決して応えることはなく、彼はそのまま憔悴して死ぬ。そして、その体は水辺でうつむきがちに咲くスイセンに変わった、というものである。だからこそスイセンは水辺であたかも自分の姿を覗き込むかのように咲くのである。（HP-wikipedia から）

なお、この花には独特の強い匂いがあり、部屋に置いておくと頭が痛くなるほどの催眠性がある。スイセンの俗名のナルキッソスは、この花の薬効から由来しているらしい。（『花の風物誌』から）

また、この薬効は別の言い方をすれば“毒性”ともなる。HPにはスイセンが有毒植物とも記され、ニラと間違えて食べて中毒を起こした例が紹介されている。

それにしても、“美しい花には毒がある”ともいわれるがスイセンのイメージにはあわない。スイセンの凜とした美しさは何にたとえればよいのか。このギリシャ神話を思い浮かべながら、じっとスイセンの花を見つめてみましょう。（参考； ， ，HP）



法面で見られるスイセン各種

(上左) 八重咲き日本水仙。バス停裏付近（3月9日）

(上右) 日本水仙。東法面北部。（2月26日）

北進入路脇、10号棟北にも見られる。

(下左) ティタティタ。矮性のスイセン。（3月16日）

ティタティタとはフランス語で“内緒話”の意味だそうで、同じくらいの草丈の花が群生する様子からの名付けらしい。

当団地南入口付近、バス停裏付近奥、東法面北部などに見られる。草丈には違いがあるが。

【トピックス】

花のミイラ？ ユリノキの？

2月初めの夜、エス・バイ・エルに出かけた折、レンガ坂のユリノキの枝にいっぱい何かがついているのに気付いた。連日暖かかったので花が咲いたのだろうか。翌日早速カメラの望遠をいっぱいひき、拡大写真をとって見た。それがこの写真。



ユリノキの枝についていたもの (2月3日)

「何だ、こりゃ！」花のミイラのような形。いや、花は5月で、こんな形ではない。何だろうと図鑑で調べたら、なんとこれがユリノキの果実とのこと。10月頃に松かさ状の集合果となり、一枚、一枚がバラバラになって、風に飛ばされ、くるくる回転しながら落下する。晩秋から初冬にかけて、いちばん外側の翼果がコップ状に残るとの事。写真はこの最後の状態のようだ。

3月に入ってもまだ枝いっぱいに残っていた。

(参考；)

【参考書】

- 『大人の園芸 庭木・花木・果樹』 濱野周泰監修 小学館
- 『花の風物誌』 釜江正巳著 八坂書房
- 『山溪ハンディ図鑑1 野に咲く花』 林弥栄監修
- 『山溪ハンディ図鑑3 樹に咲く花 離弁花1』 山と溪谷社
- 『葉っぱ・花・樹皮でわかる樹木図鑑』 池田書店
- 『日本の樹木 都市化社会の生態誌』 辻井達一 中公新書

(文・写真；石川)